

オンライン演奏から 「あわせる」を考える

Considering “Do in Sync” from the Viewpoint of Online Music Performance

声楽 藤原 諒子, ピアノ 安岡 志歩, 武庫川女子大学 大澤 智恵
(聞き手・構成: 正田 悠)

02



はじめに

コロナ禍の当初、音楽指導の現場においても感染症対策が進められ、「他者と合わせて演奏する」ことが当たり前にはできなくなってしまいました。オンライン演奏の経験を経て、再び対面に戻ってきたとき、私たちは「あわせる」ということについてなにか気づきを得ることができたのでしょうか。本稿では、音楽演奏の実践的な視点から、「あわせる」ということについて考えます。コロナ禍の当時、大学で声楽を学び、オンラインによる演奏指導を受けていた藤原諒子さん、実習助手として毎回の授業で藤原さんの伴奏をされていた安岡志歩さん、そして、大学教員として音楽の実技指導にも携わられている大澤智恵さんにお話を伺いました。

この記録は2022年8月4日に武庫川女子大学で行ったインタビューに基づいています。紙面の都合で大幅に省略した箇所があります。

オンライン演奏の工夫

正田: 藤原さんと安岡さんは武庫川女子大学の音楽学部の卒業生なのですね。

藤原: 私は声楽専攻なのですが、2019年度に学部を卒業して、2020年度に専攻科に入り、2021年3月に修了しました*1。

安岡: 私は、この3月までは母校のこの大学で実習助手をしていたのですが、今は他でピアノの講師や合唱団の伴奏をしています*2。

正田: 当時は藤原さんが声楽の学生で、安岡さんが伴奏をされていたということですが、当時、実技レッスンの授業はどのように行われていたのでしょうか。

安岡: 外出自粛のときは自宅から Skype や Zoom でつないでいました。

正田: お二人とも別々の場所からつないでいたということですね。オンラインのレッスンはどうでしたか。オンラインだとずれが気になるというのもよく聞きますが。

藤原: 私は安岡さんのピアノを聴いて歌っているので、ずれているという感覚はあまりありませんでした。私の声は安岡さんや先生のところでは遅れて聴こえていたと思うので変な感じだったかもしれません。

大澤: 歌い手、伴奏者、先生の3人ともが違うものを聴いていますよね。伴奏者のところで一番遅延が感じられると思います。例えば、伴奏者が弾いたものが0.1秒後に歌手手に届いて、その歌手の声はさらに0.1秒後に安岡さんに届くので、その

*1: 専攻科は修業年限1年のプログラム
*2: 安岡さんは主に声楽のピアノ伴奏を担当

インタビュー風景 (左から正田・安岡さん・藤原さん)



場合トータルで0.2秒遅れるということですね。

正田：オンラインの大きな問題が遅延ですね。今の話だと、伴奏者には相当のスキルが求められるのではないかと思います。

安岡：はい。はじめは、最初から最後まで通して伴奏もしてみたのですが、全く合いませんでした。仕方なく、レッスンでは伴奏を全部弾くのではなくて、前奏と間奏だけ弾く形になりました。

正田：なんと！

大澤：なるほど、それなら、音と音がずれてぶつかるということもあまり気にしないでいいわけですね。

藤原：それでも、安岡さんがところどころで和音を鳴らしてくれたりしていましたよ。曲調が変わるところでは弾いてくれていました。

安岡：えー、そうだったっけ。忘れてた（笑）。あ、そうそう、弾いていたよね。

正田：それはすごい技術ですね。全部弾いてしまう方が簡単そうにも思えます。

藤原：はじめの方に、ピアノ、歌、ピアノ、歌と交互にくるような、頻りに間奏が入る曲をやっていたのですが、最初の頃は、私が歌い終わって「ここで間奏が入るな」と予想したタイミングよりもやや遅れて間奏が入るような感じでした。でも、だんだん回を重ねるうちに、間奏や和音を早めに入れてくださるようになりました。

大澤：それは安岡さんが少し突っ込み気味、食い気味に弾いていたということですね。どうやってタイミングを測っていたのか気になります。

安岡：うーん、どうでしょう？ちょっと早めに、勘で（笑）。この辺かな、みたいな感じ。

音楽風景



正田：（笑）。なるほど、経験がモノをいうのでしょうか。

大澤：逆に、弾きはじめてたらもう他の人の音は聴かないというのが案外うまくいったりしませんか。

正田：以前大澤さんとそんな話をしたことがありましたね。メトロノームを鳴らしておいて、せーの、では始める。そしたらもう相手の音は聴かないの（笑）。

藤原：うーん、でもメトロノームに合わせつつ、というのも難しいと思います。私はそこまででもないと思うのですが、歌の場合は特に、「この音をもうちょっと伸ばしておこう」と、曲の感じで調整してテンポを揺らすことがほとんどです。経験が豊かな伴奏者さんだったら、歌い手が「これくらい伸ばすかな」というのを予想して、安岡さんのように勘で入ってしまうことができるようになるのかなと思います。

大澤：ところで私は一つの授業で複数の学生たちに同時にソルフェージュを教えていました*3。たとえばリズムパターンを一緒に手で叩くというだけでも、オンラインだとどうしても合わないわけです。だから、「今からこれをやります。1、2、3、はい」などと言って、学生たちにはそれぞれの環境でやってもらっていました*4。たまに、「では次、〇〇さん、マイクをオンにしてみてください」なんて抜き打ちでやったりもします。その場合も、双方向で合わせるのはど

*3：ソルフェージュとは、読譜・聴音・視唱など、音楽の基礎能力を養う訓練のこと

*4：大澤さんはそのまま伴奏したり同じ課題をしたりとマイクオンで、一方学生はマイクオフで参加

うしても難しいので、マイクオンはこのとき当てられた学生のみになります。

正田：大澤さんはいろいろ工夫をして授業を展開されていますよね。

大澤：応用音楽学科の学部生の一对一のピアノのレッスンもオンラインでやっていました。片手ずつしっかりと耳と手で覚えてほしいというときにはよく、学生が一方の手のための音を、私がもう一方の手で弾くべき音や、あるいは学生が弾くのと全く同じ音を演奏するのですが、双方向ではできません。そのときは思い切って「今から左手のパートを弾きますが、私はイヤホンを外します」とやってしまう。学生の音を聴いて合わせようとすると私もどんどん遅れてしまうので、その方がうまくいきます。できたかどうかは学生の自己評価で判断してもらっていました。

正田：こちらの音が相手にちゃんと届いていれば、お互いに合わせようと思わなくても、割とうまくできてしまうということですね。相手に合わせるためにあえて全ては弾かないという藤原さん・安岡さんのパターンと、全部弾くなら相手の音は聴かないという大澤さんのパターンのいずれもある程度使えそうです。専門性が高くなればなるほど前者に近づくのかもしれませんが。

オンラインで演奏指導

大澤：あるときに、演奏を録画してもらっていて、授業ではその演奏を二人でみながら、気になるところをピンポイントで進めるという方法をやってみました。そうすると、リアルでは聴き飛ばしてしまうような細かいことも、録画を活用すると拾って助言しやすくなるという思いがけないメリットもありました。

正田：スマホでもできるっていうのもポイントですね。

大澤：そうそう。「いい音だなあ」と思って、どんなすごい機材を使っているのかと思ったら、実はケースから出したiPhoneだったということもあります（笑）。

藤原：私もスマホでやっていましたが、私の場合は音質があまり良くなかったです。音質が悪いせいか、時間が経つにつれてだんだん耳がしんどくなってきます。

正田：ピアノも結構大きな音が鳴りますよね。

安岡：私もスマホでやっていたのですが、自宅の防音室が狭くて、すぐそばにスマホを置いていたので、ソフトペダル*5を踏んで、音が割れないように気をつけていました。

藤原：あとレッスンの場合、先生は私の口元を見たいはずなのですが、でも近くで歌うと音割れするし、離れてしまうと口元は見えなくなってしまいます。



説明する大澤先生

レッスン中に私が前に行ったり後ろに行ったりということはありました。

「何を見て、何をきいて、何にあわせているのだろう」

（その後、40分ほど対談を行った後…）

正田：気づいたら楽しいお話をたくさん聞かせていただきました。最後に、今回のテーマの一つが「あわせる」ということで、振り返っていきたいと思います。はじめの方に、オンラインでは全部を伴奏せずに、前奏と間奏と、あと少しのヒントとして和音を弾いてあげるといようなお話を伺いました。そう考えてみると、普段の対面での演奏でも、つまり、身体と身体が向き合って演奏しているときでも、常に100%で伴奏に「あわせる」という感じじゃないのかなという感想を抱きました。

安岡：私はコロナの前にも2年、伴奏の助手をやっていました。オンラインで「間奏はこのタイミングだろう」とタイミングを予測することができたのは、その2年の経験があったからこそだと思います。音楽の流れを予測できるようになっていて、オンラインでも歌い手に合わせて先を読むようになっていたのかなと思います。もし私が1年目で、いきなりオンラインでやってくださいと言われていたら難しかったかもしれません。

*5：弱音のためのペダル



インタビュー風景（左から安岡さん・藤原さん・大澤さん）

正田：伴奏者としての経験が大事だったということですね。藤原さんはいかがでしょう。

藤原：私は、学部のおときは普通にレッスンを受けていて、特別自分が音痴だと思ったことはなかったのですが、オンラインになって伴奏がなくなったときに、実はピアノをあてにしていたということに気づきました。前奏が終わって、伴奏が「スパツ」と消えてしまうと、頭の中でピアノの鍵盤があるようなイメージで、「次はソだ」「あ、その次はラだ」というような感じで自分の中で意識的に音を想像して合わせていけないといけな。そのときに、自分はいかにピアノの音に助けられていたのかと気づきました。

大澤：それはハーモニー（和音）の中で？

藤原：ハーモニーの中でもそうですし、バツハとか、びっくりするようなところに音が飛んでいったりするときは、「あ、ピアノがこの音に飛んだから、自分の歌もこっちの音に飛ぶんだ」みたいな感じで助けられていたのだと思います。

正田：特定の和音がない曲で伴奏がないと、特にやりにくいかもありませんね。そういう曲じゃなくても、背景にずっと音があることが歌いやすさに繋がるのでしょうか。

藤原：伴奏と歌が同じタイミングで入るということは、伴奏を聴いてから歌うのでは遅いわけです。なので、ずっとピアノを弾いてくれていて、「この次はピアノがそこに行くから、自分の声はこっちに行くんだ」というような、音楽の流れを読みながら歌っているのだと思います。

正田：フィードバックではなくてフィードフォワードですね。

大澤：そうですね。でも「次はこういう音だな」というモデルが自分の中にあって、それとピアノで聴いた音とが「合っている」ことを確認しながら、歌を修正していく。自分の中の音が正しいことを伴奏が補強してくれている感覚というのはあると思います。伴奏者がいる安心感によって自信や確信が持てるという気持ちの面だけでなく、伴奏によって音を調整しているというのがあるわけですね。フィードフォワードもフィードバックも両方含まれているはずですよ。

藤原・安岡：うん、うん。

あわせにいく演奏とあわせてくれる演奏

正田：伴奏があるといいのはよくわかりますが、伴奏者がその場において演奏してくれるのは、あらかじめ録音された伴奏に合わせて歌うのとは違うのでしょうか。カラオケみたいに。

藤原：これは人にもよるとは思うのですが、私はカラオケが苦手なんですよ。

正田：えー！どうして？

藤原：「めちゃくちゃ嫌だ」というわけでもないし、何が違うのかと言われると困るのですが、人がその場で伴奏をしてくれると、そちらに導かれるように歌えるという経験はすごく多いです。

大澤：それは視覚的なもの？伴奏者が見えるとか。

藤原：声楽の場合は、ピアニストは後ろにいるので、

演奏中に伴奏者を見ることはできません。でも身体が音を感じていて、何か音の「庄」のようなものを感じます。カラオケだとスピーカーから音が鳴っているけど、生のピアノから感じる「庄」とは決定的に違うと思います。高い声を出すときも、ピアノがだんだん上がっていくのを感じられると、自分も同じ感じで乗ることができます。機械を通した音だと無理に引き上げていく感じになってしまいます。
大澤：もし、気配が感じられるぐらいまで繊細に元々の音を再現できるような技術があったらどうなると思う？

藤原：一度体験してみたいですね（笑）。体験していないからわからないですけど、もしかしたらやりやすくなるかもしれません。ただ、事前に録音されている場合は、それに私が合わせにいくだけなので一方通行ですよ。伴奏者がいる場合は、私の歌に伴奏がうまく合わせてくれるところもあります。

安岡：経験のある伴奏者だとそういうことができます（笑）。感覚的なところもありますが、伴奏者からは歌っている人が見えているので、私は息の感じを見ながら合わせにいくようにしています。

藤原：そういう意味では、私も、「伴奏者から見られている自分」を意識しているところはあると思います。安岡さんだったら問題ないのですが、慣れない伴奏者さんだったら、大げさにタイミングを身体で示してみるところはあるかもしれないですね。

正田：そういう相性的なところも、良くも悪くも、画面越しでは違いがなくなっていくのかもしれないですね。

おわりに

現在汎用的に使われているビデオ通話システムでは、2人以上で合わせようとしても遅延が生じてしまい、演奏が崩壊してしまう感覚があります。それを回避するためには、伴奏者がメインの演奏者にあわせて、少し早く演奏しなければなりません。それを可能にするのは、音楽の文脈の中で、「今相手が聴こえている音」を予測し「ずれ」を補完するだけの経験知が必要ということを伺うことができました。さらに、そうしたわずかな時間のずれに加え、オンラインでは同じ空間にいないということが演奏に影響を及ぼします。相手の様子が見えることと、生の音・存在を感じるということが、自然に行われてきた「あわせる」という行為に必要なということを再確認することができました。

コロナ禍ではコンサートをハイブリッド（会場に観客もいるが配信もする）で行う試みがなされ、音楽演奏のあり方も変容を見せつつあります。演奏者—共演者—会場の観客—オンラインの観客のインタラクションの場が構築されてきています。身体が共在する生演奏と、切り離されたオンライン、その両

者が混じり合うハイブリッド、それぞれの可能性を見出すことで、これからの音楽を開拓していけるのではないかと、という期待も感じました。

藤原 諒子（声楽） ふじわら りょうこ

兵庫県三田市出身。武庫川女子大学音楽学部演奏学科声楽専修卒業、同大学音楽専攻科声楽専攻修了。音楽専攻科在学時に約4ヶ月間、声楽を中心にオンラインレッスンを受講する。声楽をこれまでに藤本恵子、日下部祐子、耕田芳江の各師に師事。現在は兵庫県尼崎市の公立小学校音楽専科として勤務する傍ら、演奏活動も行なっている。関西歌劇団準団員。



安岡 志歩（ピアノ） やすおか しほ

兵庫県立西宮高等学校音楽科、武庫川女子大学音楽学部演奏学科卒業。同大学専攻科修了。大学在学中、交換留学生としてアメリカのボールドステイト大学にてリサイタルを行う。兵庫芸術文化センター管弦楽団と協演。大学卒業時、井上直幸記念音楽賞を受賞。第12回宝塚ベガ学生ピアノコンクール大学生部門第1位。第9回神戸新人音楽賞コンクールピアノ部門優秀賞。平成29年度秋篠音楽堂アーティスト奨励賞。



大澤 智恵 おおさわ ちえ

武庫川女子大学音楽学部。信州大学教育学部・大学院教育学研究科で音楽教育学を学ぶ。高等学校や小学校の講師、ヤマハ音楽研究所、京都市立芸術大学等の研究員等を経て、東京学芸大学大学院で学位取得（博士（教育学））。鍵盤楽器演奏における打鍵位置制御に用いられる知覚情報や空間的記憶に注目しながら、演奏技能のしくみをふまえた音楽教育実現のための研究を行っている。日本音楽知覚認知学会、日本音楽教育学会、日本音響学会、日本音楽表現学会会員。



正田 悠 しょうだ はるか

立命館大学スポーツ健康科学部。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了（博士（文学））。生演奏における演奏者と鑑賞者の心理・行動・生理反応の社会的信号処理を主たるテーマとしながら、舞台芸術および対人コミュニケーションにおける感性情報の研究に従事。日本心理学会、日本音楽知覚認知学会、ヒューマンインタフェース学会会員。

